

保坂弘司著

大鏡全評釈

1

學
燈
社

著 者 略 歴

1906年 新潟県に生まる

1930年 早稲田大学文学部国文科卒業

昭和女子大学教授・日本大学文理学部講師等を勤める

1983年 没

主 要 著 作

『日本文学の新系譜』（久松潜一監修，1943年，旺文社）

『現代文学総説』（藤村作監修，所収論文「樋口一葉」1952年，学燈社）

『源氏物語詳解，その語法と評釈』二卷（1959年，学燈社）

『新抄日本文学』（吉田精一共編，1966年，学燈社）

『大鏡新考』全三卷（1974年，学燈社）

『大鏡研究序説』（1979年，講談社）



大 鏡 全 評 釈・上巻

一九七九年十月二十日 初版発行
一九九〇年八月三十日 三版発行

著 者 保 坂 弘 司

東京都新宿区西早稲田三一五一一〇
発行者 石 井 時 司

印刷所 大盛印刷株式会社

発行所 株式 学 燈 社

東京都新宿区西早稲田三一五一一〇
電話 〇三―五二七―二二〇五四
振替口座 東京 四―三六二五三

Printed in Japan

序

つくづくと思う、古典に立ち向かうころの厳しさを。遠い昔のことになるが、昭和三十一年に、ふとした動機で、『大鏡』の解釈と評考に参入し、当時私が主宰した雑誌『國文學』に連載した。そして、その成果を十九年を経た昭和四十九年（一九七四）に、『大鏡新考』全三巻として纏めた。久松潜一先生・山岸徳平先生をはじめとする、学界の大先輩から、いちおうの評価をいただいた。しかし、『下種のあと知恵』という諺どおり、やがてその不満・不備なところが気になり出し、その後、五年間の歳月をかけて、主として口訳・語釈の意に満たない箇所を徹底的に考え直した。なお、前著三巻本の「総論・索引篇」にもすこぶる不本意な点を感じ出したので、新しい論文を加えるとともに旧来のものにも全面的に改更を加え、新しく『大鏡研究序説』として発足させた。その関係上、「総釈・論考篇」の上・下を『大鏡全評釈』上・下二巻として独立させて、上梓することにした。過去の業績を乗り越えて、歩みを進める学徒の懸命な営みなのである。お許しをいただきたいと思う。しかし、この命を削る営みも、やがては学究の一里塚に過ぎないものとなるであろう。一里塚はやがて後に続く学徒たちによって踏み進められるであろう。いや、むしろ、そうであることに、この書の刊行の意味があると思う。

この書の刊行に当たって、多くの人々のご助言とご支持をいただいた。とくに、山岸徳平先生からは各種の史料のご貸与を、松村博司氏からは研究についての方法論を、岡一男氏・吉村茂樹氏・吉田幸一氏・小沢正夫氏・杉崎重遠氏からは数々のご助言をいただいた。なお、校異の基礎作業には、昭和女子大教授の甲斐知恵子氏をはじめ、昭和女

序

子大での教え子、小島陽子君・猪俣ひろ子君たちの、献身的な協力を得た。まことに、ただ感謝あるのみである。
最後に、これは内輪のことながら、採算のとれないわがままいっぱいの、この浩瀚な著作を、用紙事情のよくない
際に、上梓を強行してくれた石井時司社長・茂原輝史編集部長をはじめとする学燈社の主脳陣に、そして、この上梓
に惜しみなく協力してくれた編集部の諸君に、心からなる御礼を申しあげる。

昭和五十四年 夏越の日に

保坂弘司

目次

凡例

.....五

第一卷

序

.....一五

五十五代

文德天皇

.....四七

五十六代

清和天皇

.....五五

五十七代

陽成院

.....六四

五十八代

光孝天皇

.....七三

五十九代

宇多天皇

.....八四

六十代	醍醐天皇		109
六十一代	朱雀院		109
六十二代	村上天皇		109
六十三代	冷泉院		116
六十四代	円融院		116
六十五代	花山院		116
六十六代	一条院		116
六十七代	三条院		116
六十八代	後一条院		116

第二卷

左大臣冬嗣	一四
太政大臣良房	一六
右大臣良相	二五
權中納言從二位左兵衛督長良	二九
太政大臣基經	三三
左大臣時平	三三
左大臣仲平	三五
太政大臣忠平	三九
太政大臣実頼	三八

左大臣賴忠	三三
-------	----

左大臣師尹	三六
-------	----

第三卷

右大臣師輔	四二
-------	----

太政大臣伊尹	四六
--------	----

太政大臣兼通	五〇
--------	----

太政大臣為光	五九
--------	----

太政大臣公季	六二
--------	----

凡 例

一 本文 東松了松氏所蔵の卷子本（以下東松本と略称する）六軸を底本としたが、善本ではあるものの、必ずしも完全本ではないので、活字本とするに当たり、各種の工夫をこらした。

1 それぞれの巻の冒頭に巻序を示した。底本にはないので、括弧でかこんだ。

2 底本の朽損した文字は、同系統の平松本・近衛本で補正し、とくに断らなかった。

3 底本で、符号をもって細字傍書しているもの、および明らかに底本の脱落と認められるものは、本文に繰り入れて、（ ）で囲んで示した。

4 底本で斜線をもって抹削した部分（いわゆる見せ消ち）は、〔 〕で囲み、××を付して示した。

5 底本の変体仮名、ならびに古体、異体、略体の漢字は、通行の字体に改めたが、「万」「与」「礼」「弁」「号」「余」「帝」「条」「姫」「哥」「躰」「簪」などは底本のままとした。

6 反覆記号の「ㄣ」「ㄥ」「く」は底本のままとしたが、「ㄣ」が語頭にくる場合は読みにくいので、正字に改めた。

7 底本の本文中の和歌は、改行して二字下りに書き出されているが、それに続く本文は改行されていない。本書では読解の便宜上改行した。

8 底本にはないが、本書では読解の便宜上、句読点・濁点をほどこした。

9 本書では読解の便宜上、カギ括弧を用いた。語り手の言葉には「」、その中に会話のある場合は「」、『心語（心に思うこと）は「」で示した。

10 語り手を明らかにするために、「」の肩に、細字をもって（世次）（重木）（侍）のごとく表示した。

11 底本に付された振仮名はそのままに記し、濁点を施さなかった。但し、特異の訓読の場合は、通行のものを（ ）で併記した。

12 底本にはないが、可及的に振仮名を平仮名で施して、読解の便宜を計った。もちろん歴史的仮名遣いによった。

13 底本には仮名遣いに「い」と「ひ」「く」と「る」「ひ」と「る」「う」と「ふ」「え」と「へ」「え」と「あ」「お」と「を」「お」と「を」と「ほ」「は」を「わ」の混同があるが、（ ）をもって傍書して、通行の仮名遣いを示した。

14 底本の動詞「申」「給」「侍」などの語尾の送仮名を欠いているものは、便宜上（ ）を施して送ったが、当代の語法として、「給て」「給ける」などは、「給ひて」か「給うて」か、「給ひける」か「給うける」か明らかでない。いちおう整版本に従っておいだが、後考すべき問題である。

15 岩瀬本・木活字本、整版本など、流布本系に追補されている部分は、その主要なものを、本文に（＝）を付して補入した。

二 裏書 東松本を底本としたが、『群書類従』卷四百四十九所収の「大鏡裏書」を参照し、校訂した。

1 底本の順序に従って連番号を付し、対応する本文に（裏1）（裏2）のごとく傍記して、連関を明らかにした。従って、本文に付した裏番号は、必ずしも順を追っているとは限らない。

2 底本では、経歴・略歴などの記録的なものには返点・送仮名がなく、記事的なものにのみ返点・送仮名が施し

であるが、本書では注釈的観点からすべてに返点、送仮名を付した。

3 底本に返点、送仮名の施してあるものはできるだけ、それを尊重したが、通行のものと著しく異っていて、読解に苦しむものは、注釈的観点から、通行のものに近づけたところもある。たとえば、第五卷の裏書50の「丞シヤウ相手ウツカイ自相挑燈」は、現在の訓法ではよみようがなく、「丞シヤウ相手ウツカイ自相挑燈」点じ直した類である。

4 底本に空白となっている箇所については、明らかに類従本で埋めることのできるものは、これを埋めた。

5 出典、引用書は、『文徳実録』『三代実録』『日本紀略』『尊卑分脈』『公卿補任』『一代要記』のごとく示したが、記事が重複し煩瑣にわたる場合、「紀略」「分脈」「補任」「要記」のごとく、略記したところもある。

三 校異 校合に当たっては、それぞれ特色をもつ古本系、流布本系、異本系から数本を選んだ。

1 古本系としては、蓬左本（尾張徳川家蓬左文庫蔵三冊本）、桂宮本（桂宮旧蔵、宮内庁書陵部蔵三冊本、いわゆる桂宮甲本）、平松本（平松家旧蔵、京都大学図書館蔵三冊本）、近衛本（近衛家旧蔵、京都大学図書館蔵三冊本）であり、流布本系としては、岩瀬本（柳原家旧蔵、西尾市岩瀬文庫蔵六冊本）、木活字本（静嘉堂文庫蔵六冊本）、整版本（八冊本）であり、異本系としては披雲閣本（旧高松藩主松平家披雲閣蔵四冊本）である。

2 校合の諸本は、それぞれ「蓬」「桂」「平」「近」「岩」「木」「整」「披」のごとく頭字をもって略号とした。

3 本文と対照する上の便を計って、それぞれの段ごとに、本文に1・2・3……のごとく一連番号を付した。

4 この校異は、読解上の必要と、流布本の増補をあとづけようとする目的を有するもので、漢字・仮名遣い、および重要性を持たない小異にはふれなかった。また、△語釈▽で必要に応じて底本との異同を示したものは、重複を避け、△校異▽で省いたものもある。

5 岩瀬文庫本・木活字本・整版本は同一系統の流布本ではあるが、多少異同がある。括弧内の細字（六ボ組）は、

「されと（どー整）」「天徳六（二ー整）年」「御覧（らんー木）せしに」などは、同系統本の文字の相違を示すものだが、敬語動詞・補助動詞「申（しー整）き」「うせ給（ひー整）にし」などは、送仮名を示すものである。

6 流布本系の長文の補入文については、読解の便宜をはかり、原文にはないが、句読点を加えた。

四 解題 読解ならびに鑑賞の便宜を計って設けた。

1 『大鏡』のごとき歴史物語は、登場人物が錯綜するので、人物関係の簡明な把握に便するように心掛けた。

2 それぞれの段における作者あるいは作者の分身たる語り手の意図を明らかにし、長い話題においては、前段の話題との脈絡を明らかにした。

五 口訳 原文を生かす現代語訳を心掛け、かつその線に沿って工夫した。

1 原文のもつ風味をできるだけ生かし、原作者の意向を匂わせるために、「」をもって、ことばを補った。

2 作者は、自己の分身たる記述者に丁寧語「侍り」を用いて読者に伝えようとする意図が明らかに汲みとれるので、地の文に「侍り」のない箇所も、丁寧体に訳した。

3 原文の構文のままでは、口語訳において現代的表現になりにくいと考えられる箇所は、語句の順序を変えたり、意訳したりした。しかし、それも最少限度にとめるべく配慮した。

六 語釈 主として句を掲出し、句の中で、それぞれの語の、その場合の意味を捉えるようにした。

1 見出し語はゴチック体を用いたが、当用漢字のあるものは、すべて当用漢字を用いた。現行の印刷事情によるものである。

2 説明語はすべて現代の通行語、ならびに当用漢字、略字を用いた。例えば次のようである。

帯↓紙 哥↓歌 鉢↓体 筭↓算

3 説明語に付せられた振仮名は、「」にはいったもの（すなわち引用文）以外は、すべて現代仮名遣いになっている。

4 説明語は、すべて現代通行の表現に従った。従って、見出し語と一致していない。例えば次の通りである。

大宰府↓太宰府 皇太后↓皇太后 大秦↓大秦 なを↓なほ おり↓をり

5 句から語を摘出する場合、そのままの形で取り出したものもあり、終止形にして摘出したものもあるが、すべて解説の都合からである。

6 人物の死去は、天皇・皇后などは「崩」、皇太子・親王・女御・大臣等三位以上は「薨」、四位・五位は「卒」というふうに使ひ分けるのが古来のしきたりだが、ここでは「没」に統一した。

7 割注はすべて縦書きにした。従って、二字の場合、時代廻行の右書きのように見えるが、それも縦書きの原則に従っているのである。

8 文献・研究書、研究論文を引用した場合、単行本またはそれに準ずるものは『』、研究論文は「」、巻名などは∧ ∨をもって示した。

七 論考 総論たる『大鏡研究序説』に対して、これは各論として位置づけられるものである。

1 冒頭の(一)(二)などは、論の展開の順序を示すものではなく、別途の問題点であることを示すものである。

2 総論たる『総論篇』を敷衍する関係から、時に若干の論の重複している箇所もある。

3 引用文は、なるべく依拠の原典の表記を尊重したが、『栄花物語』だけは、送仮名が「給て」「給ひて」など不統一なので、通読の便を計って、送仮名のある方に統一して示した。

七 参考文献 参考した文献はきわめて多い。そのうち、とくに恩恵を蒙った注釈書、論著、論文を掲げると、次の

ごとくである。まず注釈書を掲げる。(本書に矢印のように引用させていただいた。)

大石千引著『大鏡短観抄』(五巻) 文化七年三月刊。国文註釈全書・日本文学古註大成所収。↓『大鏡短観抄』

鈴木弘恭著『校正大鏡註釈』(全一卷) 明治三十年刊。↓『校正大鏡註釈』

小中村義象・落合直文共著『大鏡詳解』(和四冊、洋一冊) 明治三十年七月刊。↓『大鏡詳解』(落合)

関根正直著『大鏡新註』(全一卷) 大正十五年十一月刊。↓『大鏡新註』

佐藤球著『大鏡詳解』(全二巻) 昭和二年二月刊。↓『大鏡詳解』

池辺義象著『^{新註}大鏡』(全一卷) 昭和三年刊。↓『^{新註}大鏡』

橋純一著『^{原文}大鏡新講』(全二巻) 昭和二十九年五月刊。↓『大鏡新講』

峯村文人著『大鏡新釈』(全二巻) 昭和二十九年九月刊。↓『大鏡新釈』

松村博司著『大鏡の新しい解釈』(全二巻) 昭和三十四年九月刊。↓『大鏡の新しい解釈』

松村博司著『日本古典文学大系・大鏡』(全二巻) 昭和三十五年九月刊。↓『日本古典文学大系・大鏡』

秋葉安太郎著『大鏡の研究』(上・下二巻) 昭和三十六年九月刊。↓『大鏡の研究』

岡一男著『古典日本文学全集・大鏡・増鏡』(全二巻) 昭和三十七年五月刊。↓『古典日本文学全集・大鏡』

つぎに、論著・論文であるが、これはきわめて多いので、とくに恩恵を蒙った主要なるものと定める。これ以外のももの、引用の箇所において、一々明記した。

山岸徳平『大鏡概説』(岩波講座『日本文学』昭和八年刊)

平田俊春『大鏡の成立と作者』(『平安時代の研究』昭和十八年刊)

小松茂人『大鏡の人間』(『文学』昭和十八年五月)

北西鶴太郎「大鏡の文芸性」(『文芸と思想』昭和二十七年一月・二十八年一月)

松本治久「大鏡の批判精神に関する一考察―道長を中心とする作者の態度―」(『平安期文学研究』昭和三十二年十月)

川口久雄「大鏡の成立と時代」(『国文学』昭和三十二年十二月)

山岸徳平「大鏡の構成と思想」(『国文学』昭和三十二年十二月)

松村博司「大鏡と栄花物語との関係」(『国文学』昭和三十二年十二月)

宮本正寿「大鏡の批判性に関する覚え書―主として人物形象をめぐって―」(『日本文学』五月号、昭和三十四年五月)

岡 一男「大鏡」解説(『古典日本文学全集』昭和三十七年五月)

小島嬰礼「大鏡と大宅世継の性格」(『国学院雑誌』昭和三十八年一月)

松本治久「大鏡の歴史観」(『跡見学園国語科記要』昭和三十八年三月)

迫 徹朗「大鏡の創作方法管見―公任三船の逸話の史実性をめぐって―」(『平安文学研究』昭和三十七年十一月)

佐藤謙三「大鏡と宮廷女流」(『国学院雑誌』昭和四十年三月)

塚原鉄雄「大鏡の虚構と事実」(『明日香』昭和四十年四、五、六、七月)

福井貞助「大鏡における夏山繁樹と大和物語」(弘前大学『文経論叢』創刊号、昭和四十年十二月)

益田勝実「虚構△同時代史▽の語り手―「大鏡」作者のおもかげ―」(『国文学・解釈と教材の研究』昭和四十

一年二月)

山中 裕「大鏡の歴史批判の性格」(『国文学・解釈と教材の研究』昭和四十一年二月)

山中 裕「大鏡の藤原道長批判」(『文学』昭和四十二年八月)

安西迪夫「大鏡『昔物語』の構成」(『言語と文芸』昭和四十三年五月)

松村博司「安和の変に関する大鏡・栄花物語の記述について」(『名大文学部二十周年記念論集』昭和四十三年十

二月)

増淵勝一「大鏡著作の文芸的意義」(『文芸論叢』昭和四十四年二月)

河北 騰「大鏡批判性についての一考察」(『平安文学研究』昭和四十五年六月)

安藤太郎「大鏡『昔物語』の一考察——中務上京説話について——」(東京成徳短大『記要』昭和四十六年一月)

河北 騰「大鏡作者の感受性」(『平安文学研究』昭和四十六年六月)

松本治久「大鏡の主題と構想——大臣の逸話からみて——」(『平安文学研究』昭和四十六年八月)

なお、『大鏡』に関する研究文献については、昭和三十二年以前のは、『国文学・解釈と教材の研究』第二巻第十二号(昭和三十三年十二月)所載、竹鼻績氏「大鏡・増鏡研究文献総覧」に網羅しており、昭和二十年八月以降昭和四十一年七月までのものについては、小久保崇明氏の「戦後における『大鏡』文献総目録」(『大鏡の語法の研究』付録)に詳しい。